

# ユネスコ創造都市ネットワークに 認定された旭川

竹中英泰

ユネスコは、文化芸術のもつ創造性を地域振興等に領域横断的に活用し地域課題の解決に取り組み地方自治体を「文化芸術創造都市」と位置付け、都市間ネットワークに意欲的な創造都市を支援している。創造都市は七つの分野（文学、映画、音楽、デザイン、メディアアート、フォークアート、食文化）で認定されるが、旭川市は二〇一九年にデザイン分野で認定を受けた。一九九〇年に旭川市開村一〇〇年の記念事業として始まったIFDA（国際家具デザインフェア旭川）は、三年毎の開催を続け、すでに一一回を数える。応募してくる内外のデザイナーと交流を深めることで優れたデザインの家具を育ててきたマチとして評価されたのだ。二〇二〇年からは家具に限定せず、産業全般や大学等、さらに周辺自治体も巻き込んだ「デザインウィーク旭川」を展開し、マチを挙げてデザイン創造都市の浸透を図っている。期間中のイベントには大学生が中高生等に呼びかける「まちなかキャンパス」や、さまざまな実験・職業体験ができる「わくわくサイエンス」などもあり多彩だ。

二〇〇八年五月、旭川医科大学の声掛けで、市内の大学・高専の連携を強化し産学官

協働のまちづくりを目指す旭川ウェルビーイング・コンソーシアムが発足、二〇一二年から一般社団法人となり旭川市との連携を深めている。「命の誕生」をテーマとする小中高生への出前授業<sup>1</sup>私の未来プロジェクト事業（旭川市委託）では、助産師や保健師による講話を行い、大学生スタッフが胎児人形等を使った体験型のグループ学習をリードする。性教育補完の機能を果たす一方、スタッフ参加の大学生たちにとってはコミュニティ・ベースドラーニングだ。こうした協働・共創の分野が広がり、市内の大学生全員が就学期間の必修科目の一つとしてどの分野かに参加する仕組みにまで深化し、卒業生が地域で活動すれば、双方ウィーンウィンのまちづくりにつながる。コンソーシアムはこうしたことを期待して運営されている。

旭川大学は二〇二三年四月に旭川市立大学に衣替えし、二年後には地域創造デザイン学部が新設される。三十年余に及ぶIFDAの展開とデザインマインドの醸成、十数年におよぶ大学間連携と地域志向の人材育成、そして旭川市立大学の発足（予定）は、家具のマチ・旭川を創造都市・旭川という舞台へ引き上げよう。

近年、「デザイン経営」への期待が高まっている。コロナ禍で在庫を抱えた男山酒造は、一度瓶詰した日本酒の再ブランドに「諸事情」の名前を付け完売した。ネーミングにはデザイン事務所との協働があった。地場企業の商品開発を支援する産業振興奨励賞（旭川信金主催）では、外部デザイナーとコラボする商品開発が目立ってきている。受賞製品の一つに、アイヌ出身のデザイナー提案で開発したTシャツがあり（現在ウポポイで販売、同様に京都の漆器デザイナーとコラボして漆塗りの置物を商品群に加えたクラブト会社がある。こうした外部デザイナーとの共創の根っこにはIFDAによる蓄積がある。三年おきのコンペには世界中から五〇〇〇〜一〇〇〇〇点のデザイナーの応募があり、それらのうちの優秀作を地元業者が製品化してきている。地元をリードするトップ二社は常時二〇〜三〇人の契約デザイナーを抱えて商品開発に臨んでいる。加えて、「この木の家具・北海道プロジェクト」では道産広葉樹の使用を謳う地産地消を進めている。地域志向の人材育成や地域資源の活用を足場にグローバルな視点を持つ創造都市旭川の歩みが新たなステージに踏み出している。

今年の「あさひかわデザインウィーク2022」は、「デザイン創造都市旭川シンポジウム」（六月一八日）で幕を開ける。テーマは「デザイン・森・デジタルー持続化可能な地域の未来」だ。

<sup>1</sup> へたけなか ひでやす・旭川大学名誉教授  
／旭川ウェルビーイング・コンソーシアム理事